松坂正次郎　氏の投稿記事

耕 65 号

精神的万年居候

松坂正次郎

私が上北沢の山崎不二夫先生宅に“居候”させていただいたのは昭和20年3月はじめから約3年間である。当時先生は東京農専の教授で，学位論文となった「成層土壌の降下浸透に関する研究」を手がけておられた。その手伝いに加わったのが先生との出会いである。

府中の「駒場寮」を出て，下馬の叔母の家から通っていたが「それじゃ時間的にたいへんだから，うちにいらっしゃい」というお言葉に甘えて，先生ご夫妻のお世話になった。

先生の「農業工学研究室」では4人の研究生が，日がな一日，先生手作りの「降下浸透試験器」（材料は板とガラス板）に粒子の異なる砂で層を作り，上から水を流し込んで水圧を計り，データを記入し，余暇には研究室前の野菜畑の手入れをしていた。

通勤・通学も先生とご一緒。上北沢での夕食後は俳句を批評し合ったり，万葉集を論じたりしたが，戦局がらみの話は殆どなかった。

〈降下浸透実験〉

試験器に映る辛夷（こぶし）の花の昼　先生

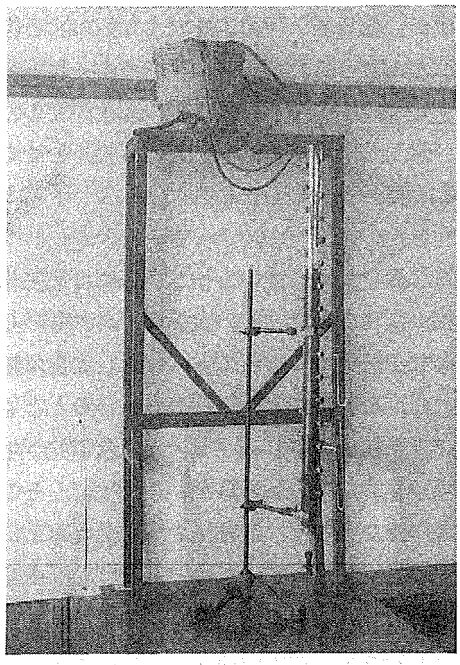
ビーカーに師の影うごき風光る　小生

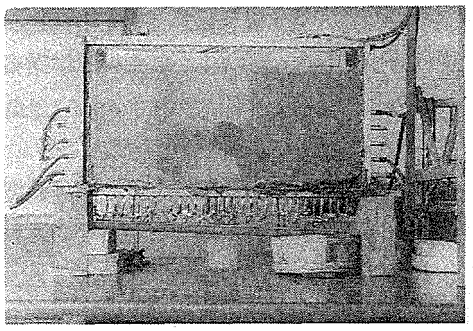
目盛読み疲れ外（と）の面（も）の春を恋う　先生

U字管ひと日目守（まも）りぬ春ひと日　小生

瓶の桃枝咲き下り散りそめぬ　先生

師の眼鏡昏るる春日になお光る　小生





山崎研究室（農業工学）の浸透試験器

—1945年4月—

仙台に復員，学校が９月に再開されたので10月上旬に上北沢に戻り，復学した。

上北沢では二階の洋室をあてがわれた。以前は先生の兄の洋さん（一高生時に肺結核で死去），それに先生も使われた部屋である。20年４月頃，何気なく，天袋の戸を開けたら「岩波文庫」本がぎっしり並び，１冊を取り出したら『賃労働と資本』という本。当時はマルクスもエンゲルスも知らず，それが“発禁本”とも知らず，京王線の中で読んでいた。先生が「松坂君，何の本を読んでるの」と聞かれたので「これ，二階の天袋にあった本です」と件の本を示すと，先生の顔色が変わって「君，これはまずいよ」と言って，そそくさとご自分の鞄にしまわれた。

◇ ―――――――― ◇

私が復学した府中のキャンパスには民主化の嵐が吹いていた。その先頭に，あのものしずかな山崎先生が立っておられた。先生は教職員組合を組織して委員長をつとめるとともに，「山崎研究室」を根城にして進歩的学生を糾合するための「雑談会」を設けて，その指導に当たられた。これはやがて会員73名に及ぶ「駒場社会科学研究会」に発展し，多くのアクディヴを輩出し，学生自治会の母体になっていった。先生の指導下に私たちは学園民主化に全力を傾け，２・１ストの支援，壁新聞や機関誌「ＭＡＲŜＵ」（先生の命名＝エスペラント語で“進め”）の発行，学園祭での弁論部との対抗弁論大会への出場（上位入賞），演劇活動などを推し進めた。

昭和21年は食糧事情が最悪となり，「食糧メーデー」も闘われた。上北沢の庭先に野菜を作るだけではどうにもならないので，上石神井に50坪ほど借りて，本格的な菜園作りを開始した。日曜日ごとにリヤカーに鍬，鎌を積んで，私が梶をとり，先生と涼子奥様が後を押して通い，耕し，種子を播き，草をむしり，汗を流し，上北沢－上石神井を往復した。

サツマイモ，ジャガイモ，ムギ，大豆，ホウレンソウ，コマツナなどを作り，秋葉満寿次先生や新沢嘉芽統先生にもお裾分けした。新沢先生は新婚ほやほやの頃だが，お訪ねすると必ず地代論争をいどまれた。

21年８月の休暇には「山崎研究室」が西富士開拓予定地の調査に入った。旧兵舎に泊り込んで山梨県南都留郡，西八代郡のススキ原野の測量・調査をしたのだが，食料が乏しく，いつも腹ペコ。意を決して沼津に買出しに行ったが魚の姿は見えず，オキアミだけ。これをメシ代わりにしたが，３度目からは臭いが鼻について口が受け付けない。あの広漠とした荒れ地を腹ペコで，８月の太陽の下を歩き回った（自動車などなし）ことは忘れない。

先生の事蹟で特筆すべき一つは，山崎家が長野県埴科郡南条村に所有していた小作地を，マッカーサー農地改革実施前の20年秋に全面解放したことである。

また，21年の戦後初の総選挙に世田谷から徳田球一が立候補したとき，先生が街頭連呼での応援を言い出され，私が連呼するのを先生がステッキを持ってボディガードをされた。「松坂君、右翼の妨害があるかもしれないからね」というのである。

21年には新劇の上演が急激に活発化，当時の日劇に，先生と奥様と３人で観劇に繰り出しました。小沢栄太郎，原泉，千田是也らが活躍をはじめており，クライスト原作の『こわれがめ』，ゴーリキー原作の『どん底』などの翻訳劇や久保　栄の『火山灰地』などを見ました。先生は私にこっそり「家内はね，宝塚歌劇の方が好きなんですよ」と耳うちされたことがありました。

◇ ―――――――― ◇

昨年12月18日，山崎農研は秋田県稲川町の長里昭一さんを招いて「凶作の実相」をきき，そのあと恒例の忘年会を持った。いつもは20～30分で席を立たれる先生が，珍しくお開きまで残られた。いまにして思えば，山崎農研の会員に「お別れ」をされたのではないかという気がする。とくに稲川町は山崎農研の初の現地活動である「欠陥田んぼの是正」を実践した地であるという因縁もある。

先生は「私は研究者ではあっても，よい教師ではなかった」と言われていた。たしかに“教壇の教師”ではなかったが，真の“人生の教師”であった。

私にとって先生ご夫妻は，畏れ多いことながら－“第二の父・母”という存在である。それに酬いることを何もしていないことを申し訳なく思う。

先生宅での居候生活は３年だが，精神的居候は永遠に続く思いである。

師父逝けり全山の蕪芽ぶかせて

師を偲ぶ催し済んで虫しぐれ

（「農政と共済」編集主幹）

“煙たい人”から“おじさま”へ

講演 (5)

山崎先生の思い出

◉松坂正次郎

山崎先生の山崎農研を中心とするご活躍の中心は、「耕No.65」(1994年12月)の特集『回想の山崎不二夫先生』ならびに『研究所創立25周年記念号』にあたる「耕No.85」(2000年6月)に余すところなく記録されており、付加すべき事項も言葉もないと思う次第です。そこでここでは、世田谷区上北沢の先生のお宅での「居候」生活の間のエピソードなどをご紹介したいと存じます。

府中の学生寮「駒場寮」は1年限りで出るしきたりでしたので、昭和19年の春、親戚の家に移りました。最寄の駅は東横線祐天寺で、2時間かけて「山崎研究室」に通い、「成層土壌の降下浸透実験」を仲間の学生3名と取り組みました。そんなある日、先生から「祐天寺からでは大変だ。上北沢の私の家にきたらどうか。亡兄が使っていた2階の部屋だが、明るくてよいと思うよ」というありがたいお言葉を頂戴し、ただちに「居候」を決心しました。先生は毎週日曜日に、上北沢から上石神井に借りていた50坪ほどの畑に行かれるので、鍬や鎌などを積んだリヤカーは私が引き、現場に着くと先生と涼子奥様(古代蓮を発見した大賀一郎博士の姪)と3人で野菜づくりに汗をながしました。主に葉菜、根菜の栽培でし

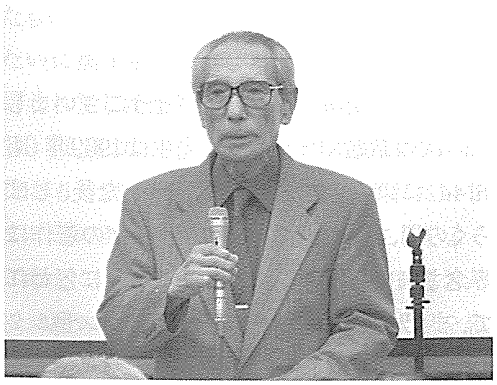
たが、収穫物を積んで帰る途中、秋葉満寿次先生宅にお寄りしてお裾分けし、上北沢の近くに居られた新澤嘉芽統先生宅にも私がお届けにあがったものです。

新澤先生は玄関先で私に「君は大谷(省三)先生の経済学講義を受講しているそうだが…」と言い、『地代論争』を挑んでこられる。「上石神井の50坪の地代はいくらか。そのうち絶対地代と差額地代はどうなっているのか」などと斬り込んでこられるのですが、私は「野菜は地代論争している間に萎びてしまいます」と言って逃げ帰ったことをおぼえております。

昭和20年3月9～10日にはB29の焼夷弾投下で東京下町は焼野原に、その炎と煙は山崎邸からも遠望できました。そうした中で5月から、先生の実験は研究室から府中中河原の学校水田に、さらに千葉県富岡村の農家の水田で続行したのですが、“水抜け田”のため成果が上がらず、2日で引き揚げました。昭和20年7月に、私にも「赤紙」が来て、8月1日、静岡県磐田の中部129部隊に入隊したのですが、広島・長崎に原爆が投下され、15日に敗戦、郷里・仙台に復員、学校再開の連絡で10月上旬に復学、先生のお手伝いを続けました。21年4月のある日、居候の部屋(先生の兄上の洋さんの居室。この方は一高生時に肺結核で死去)の天袋の戸を何気なく開けたら「岩波文庫」本がぎっしり、一冊取り出したら『賃労働と資本』でした。マルクス、エンゲルスも知らず、電車の座席で読み始めたら、「君、何の本を読んでるの」と先生に聞かれ、件の本をお見せすると、顔色を変えられて、そそくさとご自分の鞄にしまわれました。

21年8月の夏季休暇期に「山崎研究室」は、先生指揮のもと、学生5人が西富士の旧兵舎に泊まりこみで開拓予定地の測量調査に入りました。山梨県南都留郡、西八代郡のススキ原野です。自炊したのですが、食料が乏しく、みんな腹ペコ。先生が私に「沼津までいったら何か手に入るのでは…」とおっしゃるので、列車で買出しに行ったのですが、魚の姿は皆無でオキアミだけ。やむなく、それを仕入れてメシ代わりに出しましたが、誰もが、三度目からは口が受け付けないとボヤく有様。広漠たる西富士の荒野で、8月の真夏の太陽の下、細い体躯で測量の指図をされておられた先生の姿は、今も忘れられません。

昭和21年2月1日、GHQの指令で農地改革(一次)が行なわれました。すでに、この半年前に先生は、長野県埴科郡南条村に所有していた小作地を無償で全面解放されています。また、同年4月、婦人参政権を認めた新選挙法に基づく総選挙が行なわれましたが、共産党は世田谷の選挙区に徳田球一氏を立



[まつざかしょうじろう]
1925年生まれ。1947年東京農工大農学部卒、全国農業共済協会就職。週刊「農業共済新聞」編集長、「月刊 農業共済」編集長、週刊誌「農政と共済」創刊、編集長兼コラムニスト。「農政ジャーナリストの会」会員。山崎農業研究所顧問

てた。先生は、投票日(4月10日)前日の夕暮れ時、「松坂君、これから徳球さんの応援に町内を回るから、君は、“徳球さんに投票を”と連呼して下さい。右翼の妨害も心配だから、私はステッキを持ってガードするから」とおっしゃった。気胸療養のため肋骨を数本切除している細身の先生の志の深さに打たれたものです。徳球さんはみごとに当選しました。

先生は、身体は華奢だったが、感性、知性、意志力、忍耐力、実践力には無二のものがおありであった。しかも、実験や研究会、その成果の成文化は「その日のことはその日の中に」始末するという考えで整理された。それに、趣味やスポーツも単なる“お遊び”では終わらせず、「何でもやってやろう」という好奇心も人一倍お持ちでした。

ご自宅の仕事部屋には有名な画家の絵を飾っておられたが、ご自分も「サロン・デ・ボザール展」に出展を重ね、特選や銀賞にも入選されました。登山では友人を失うという悲劇にも遭遇されましたが、スキーも長く続けられ、「先生にはご無理では」と心配したゴルフにも、私や片谷克也君を引き連れて、ワンラウンドは回られました。俳句には特に関心をお持ちで、夕食後は必ず私を誘って「2人句会」を催された。最晩年にお茶の水の「三楽病院」にご入院後も、平成6年(1994年) 5月25日にお亡くなりなされる2ヶ月半前まで句作を続けられましたが、並の人のできることではありません。2月の句には「季節なき病院暮らし冬を過ぐ」があります。もうすぐ春が来る。さすればきっと病も「冬を過ぐ」と強く思われていたのでしょう。

「2人句会」での先生の句と私の駄句を紹介させていただきます。

「こぶし」

試験器に映る辛夷のはなの昼　　山崎

ビーカーに師の影うごき風光る　　松坂

「とも」

目盛読み疲れ外の面の春を恋う　　山崎

U字管ひと日目守りぬ春ひと日　　松坂

瓶の桃枝咲き下り散りそめぬ　　山崎

師の眼鏡暮るる春日になお光る　　松坂

最後に、先生は教職の傍ら、研究に全力を傾け、その成果はすべて文書化されています。田渕先生がつくられた資料を見ても、ほとんど休みなく執筆を続けられており、一見ひ弱に見えたが、常に燃えていて、最後の最後まで“切れる”ことのない“巨人”であったと実感させられます。

今年の5月25日、先生の15回忌に際し、多摩墓地の霊に詣でるとともに、6月には山崎農研と先生と関わりの深い教え子たちの共催で、このフォーラムが東大農学部の教室で開かれることをご報告いたしました。

なお、山崎農研に対して、私なりにお手伝いできたことは、「耕」の編集への参加と会員の勧誘です。仕事柄、全国の各地方に友人・知己がいたおかげで、59名(うち22名が地域の農業生産者と農業関係組織の人)の方に入会していただきました。誠にありがたいことと思っています。また、涼子奥様(平成14年7月27日死去)には非常にお優しく居候させていただいたご恩は忘れることはできません。

――司会:松坂さん、ありがとうございました。次の話題ですが、山崎先生は1969年(昭和44)に東京大学を定年退官された後、しばらくの間、『農地工学　上、下』などの著作に専念されておられましたが、1972年に乞われて、まだ小さな会社であった太陽コンサルタンツ(現NTCコンサルタンツ、NTCインター